「サマースクールinかんばら」の報告

著者名(日)	川口 宗敏，望月 達也，鳥居 厚夫，岩渕 潤子，大山 千賀子
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	3
ページ	123-128
発行年	2003-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000535/

「サマースクールinかんばら」の報告

Report on the Summer School in Kanbara

This paper is the report on the Summer School in Kanbara which held in 2001 and 2002. The Summer School has opened four workshops in 2001 and two workshops in 2002 for townspeople of Kanbara and students of SUAC (Shizuoka University of Art and Culture). The purpose of this school is to contribute to the art and cultural activities in Kanbara, to give intelligence of the advanced and various art and culture of SUAC to the public, to make the cultural and human exchange between Kanbara and SUAC, and to brush up the teaching abilities of participated teachers and the learning abilities of participated students and townspeople. And, the school has obtained excellent results by judging from numbers of participants and their reputation in

川口　宗敏
デザイン学部空間造形学科
Munetoshi KAWAGUCHI
Faculty of Design
Department of Space and Architecture

望月　達也
デザイン学部技術造形学科
Tatsuya MOCHIZUKI
Faculty of Design
Department of Art and Science

鳥居　厚夫
デザイン学部空間造形学科
Atsuo TORII
Faculty of Design
Department of Space and Architecture

岩渕　潤子
文化政策学部芸術文化学科
Junko IWABUCHI
Faculty of Cultural Policy and Management
Department of Art Management

大山千賀子
文化政策学部芸術文化学科
Cicaco OOYAMA
Faculty of Cultural Policy and Management
Department of Art Management

1．はじめに

現在、地方中小都市は、地方分権の考えに基づいて独自の地域活性化策を模索している。静岡県蒲原町では、文化芸術活動を中心に据えた町活性化を企画し、2000年に本学に対し文化芸術活動の支援を要請してきた。そこで、本学教官・学生と蒲原町民との共同ワークショップ形式によるサマースクールを実験的に試みた。

このサマースクール開催の目的は、蒲原町内の文化財や歴史財などの資源を活用して町の文化芸術活動を活性化すること、本学の先進的かつ多様な文化芸術活動を学内・外へと情報発信すること、本学と蒲原町との文化・人材交流の促進を図ることであった。

本稿では、（1）2000年12月に開催した「プレ・サマースクールinかんばら」、（2）2001年9月に開催した「サマースクールinかんばら」2001年、（3）2002年8月に開催した「サマースクールinかんばら」2002年の活動概要を報告する。

2．「プレ・サマースクールinかんばら」

2000年12月9日、蒲原町文化センターにおいて「プレ・サマースクールinかんばら」を開催した。このプレ・サマースクールでは、本学教官による2つの講演とシンポジウムが行われた。この催しは、本番のサマースクールへ向けた準備段階の1つの活動として位置付けられた。

2.1　川口宗敏　講演「芸術文化の香り漂う街」

この講演では、「みがく、いかす、たくわえる」からなる3つのキーワードを軸として、今後の蒲原町における文化芸術活動の展望が述べられた。先進的な外国の事例として、ザルツブルクにおける音楽、ブルージュにおける景観と美術、フライブルクにおける環境と交通、ニューポートにおける市民ボランティア活動などが紹介され、生活の豊かさと選択肢の多さについての講演が行われた。

2.2　岩渕潤子　講演「小都市における文化を活かしたまちづくり」

この講演は、文化のまちづくりを推進している茨城県古河市での岩渕の経験を踏まえ、行政と文化芸術との関わり、文化を活かしたまちづくりの在り方についての講演が行われた。ここでは、選挙に左右されない明確な文化行政の指針を持つこと、古い街並みや文化的資源を有効に活用することなどが指摘された。

2.3　シンポジウム「21世紀・蒲原町は文化芸術活動でよみがえる」

このシンポジウムは、山崎寛治蒲原町長、小西亮衛と伊豆川昌代の町民2名、岩渕からなる4名のパネリストに、川口をコーディネーターに進められた。シンポジウムでは、パネリストによって町の文化現況に対するそれぞれの考え方が提示され、サマースクールに対する期待と展望についての議論がなされた。

3．「サマースクールinかんばら」2001年

2001年9月5日から9月9日までの5日間、蒲原町文化センターを主会場に「サマースクールinかんばら」2001年が開催された。このサマースクールは、4つのワークショップが設けられ、町民30名、本学教官5名、学生29名が参加して行われた。ワークショップ1は「夜の蒲原」をテーマに、ワークショップ2は「風景シミュレーション」をテーマに、ワークショップ3は「生活風景描写」をテーマに、ワークショップ4は「竹久夢二の空想美術館」をテーマに実施された。以下、4つのワークショップの活動内容の概要を示す。

3.1　ワークショップ1「夜の蒲原」

このワークショップ1「夜の蒲原」では、蒲原町の古い街並みに調和した夜の景観を意識し、照明作品の制作が行われた。使用した材料としては、富士川河川敷の流木、城源寺の竹、その他に木材、和紙、鉄、布、ガラスといった身近にある素材を使用し、光源は電灯、ローソクなどが用いられた。一人一作品の制作を原則としたが、町民と学生による共同作品も制作可能とした。最終的に29の照明オ

the final night presentation of workshops.

ブジェが完成した。夜間の照明オブジェ設置場所として、町道善福寺線の歩道空間が充てられた。夜間行われた照明オブジェのプレゼンテーションには、ワークショップに参加できなかった多くの町民も集まり、作品に対する評価も好意的であった。このワークショップ１は、川口宗敏・鳥居厚夫の指導により行われた。（写真１、写真２、写真３、写真４参照）

写真１．蒲原海岸での流木採集風景

写真２．作品制作風景

写真３．内藤史成の照明作品「半月」

写真４．戸田　勝の照明作品「摩訶不思議」

3.2　ワークショップ２「風景シミュレーション」

このワークショップ２「風景シミュレーション」では、「行政と住民のコラボレーション」と「町づくりのためのコミュニケーション」を目的とし、パソコンによるシミュレーション作品制作を行った。蒲原町の古い街並みや堀川運河などを写真やビデオで撮影し、これを材料に写真加工や動画編集作業を行い、昔の街の姿やこれから整備して欲しい景観イメージの制作を行った。例えば、電柱のない街並み、雑草のない運河、エアコン屋外機や自動販売機のない民家の外観などを再現した。このワークショップ２は、望月達也の指導により行われた。（写真５、写真６、写真７、写真８参照）

3.3　ワークショップ３「生活風景描写」

このワークショップ３「生活風景描写」では、「現代を象徴するもの」と「木」の２つのテーマに分け、撮影が行われた。ワークショップには、学生５名と町民６名に加え、地元の高校生７名が参加した。「現代を象徴するもの」では、旧東海道の街並みや旧五十嵐邸の見学撮影を行った。「木」では、東漸寺～椙守神社～御殿山にて撮影を行った。最終的な作業としては、撮影写真から各自10枚を選択し、プレゼンテーションを文化センター・ホールにて行った。このワークショップ３は、大山千賀子の指導により行われた。（写真９、写真10、写真11、写真12参照）

写真５．資料作成風景

写真９．旧東海道での撮影風景

写真６．写真撮影風景

写真10．東漸寺での撮影風景

写真７．動画編集風景

写真11．教官による指導風景

写真８．石野欽二制作の風景シミュレーション

写真12．町民による成果発表風景

3.4　ワークショップ４「竹久夢二の空想美術館」

このワークショップ４「竹久夢二の空想美術館」では、町所有の夢二の作品をインターネット上で公開するという展示方法を考え、参加者全員でホームページを作り上げる企画であったが、夢二と蒲原町の接点が少ないことから、アプローチを変更した。映像作家の岸本康氏と民間シンクタンクで観光による活性化を研究している黒澤行紀氏の協力により、町内ウォッチングや撮影を行った後、竹久夢二を活用した美術館構想についてディスカッションが行われた。また、夢二の恋愛を中心とした作品に着目し、参加者全員が恋愛詩を創作・発表した。このワークショップ４は、岩渕潤子の指導により行われた。（写真13、写真14、写真15、写真16参照）

以上、「サマースクールinかんばら」2001年では、ワークショップ１・２は５日間、ワークショップ３・４は２日間の日程で行なわれた。このサマースクールは初回ということで、大きな行動フレームだけは決めてあったが、敢えて細かなカリキュラムは決めず、ワークショップの内容については指導教官の裁量に任され実施された。この事業結果に関して言及すれば、参加者に対するアンケート結果から、大半の参加者は良かったと回答している。また、ワークショップに参加しなかった一般町民の「夜の蒲原」の展示作品に対する評価は、非常に高いものがあった。また、主催者でもある行政側から事業を継続したいという要望が、大学側に寄せられた。

4.「サマースクールinかんばら」2002年

「サマースクールinかんばら」2002年は、2002年８月22日から８月25日までの４日間、蒲原町文化センターを主会場に開催された。このサマースクールは、前年度に開催された「サマースクールinかんばら」2001年を継続した事業である。ここでは、２つのワークショップが設けられ、町民19名、本学教官３名、学生18名が参加した。ワークショップ１は「夜の蒲原PART2…音と明か

写真13．旧五十嵐邸訪問風景

写真14．ビデオ撮影風景

写真15．ディスカッション風景

写真16．恋愛詩の朗読とビデオ撮影風景

りの融合」をテーマに、ワークショップ２は「暮らし・まち並み風景シミュレーション」をテーマに実施した。以下、２つのワークショップの活動内容の概要を示す。

4.1　ワークショップ１「夜の蒲原 PART２…音と明かりの融合」

このワークショップは、前年度よりも作業日数が１日少なくなったが、前日に富士川河川敷での流木拾いを行い、かつ地元NPO「里山研究会」の協力により竹収集を済ませたことで、作品制作時間の確保を図った。使用材料は、前年度同様、流木、竹、和紙、鉄、布などを使用した。光源は電灯、ローソクなどを用いた。照明オブジェの完成作品数は、44作品となった。夜間の照明オブジェ設置場所として、前年度と同じ町道善福寺線が充てられた。５時間の展示時間帯は車の進入を禁止し、歩車道をフルモール化することで、町道善福寺線を大きなイベント空間に変えた。このイベント空間の主役である照明オブジェに加え、尺八奏者である縄巻修巳氏の演奏、地元の民謡と尺八の会による演奏などにより、テーマである「音と明かりの融合」を演出した。蒲原町商工会協力による出店もあり、来場者は約1,500人を数え、照明作品のプレゼンテーションとしては、大盛況であった。これは、前年度の反省を踏まえ、視覚中心の「明かり」だけでなく、聴覚にも訴える「音」を導入することで、より多彩な演出が可能となった成果であると言える。このワークショップ１は、川口宗敏・鳥居厚夫の指導により行われた。（写真17、写真18、写真19、写真20参照）

写真 17．町道善福寺線でのプレゼンテーション風景

写真 18．学生と町民の共同制作風景

写真 19．「音と明かりの融合」プレゼンテーション風景

写真 20．鈴木朝子の照明作品「炎」

4.2　ワークショップ２「暮らし・まち並み風景シミュレーション」

このワークショップ２「風景シミュレーション」では、写真のデジタル技術を活用し、蒲原町に残された文化財や歴史的資産を記録し、町のこれからの文化財保存や教育に生かす試みであった。大別して２つのことが行われた。１つは、昔の蒲原町の写真を収集し整理する。昔の写真をスキャニングし保存する。昔とほぼ同じ場所で、現時点での写真を撮影

し、過去と現在を比較・考察する。2つ目は、蒲原町に残る「蒲原古代塗」という漆作品を撮影し、デジタル技術を活用して記録する。以上の作業の記録結果は、町道善福寺線で行われた照明オブジェの展示と平行して、一般の町民に蒲原町の文化財に対する理解を更に深めてもらう試みとして、夜間における屋外空間でのスライド上映が行われた。参加した人は、昔の蒲原町の姿を知り、かつ写真のデジタル技術を学んだだけでなく、世代間で活発なコミュニケーションが行われたことも有意義であったと言える。このワークショップ2は、望月達也の指導により行われた。（写真21、写真22、写真23、写真24参照）

以上、「サマースクールinかんばら」2002年では、ワークショップ1・2とも4日間の日程で実施された。このサマースクールでは、ワークショップ数が4から2に減ったが、内容・評価とも前年度と比べて遜色ないものであったと考える。それは、前回の経験を活かし、スムーズなワークショップ運営と成果発表にけるプレゼンテーション方法において工夫・演出することができたからである。

5．まとめ

2001年と2002年の2年間に渡り実施した「サマースクールinかんばら」は、当初の目的である、（1）蒲原町の文化芸術活動を中心とした地域活性化への貢献、（2）本学の先進的かつ多様な文化芸術活動の学内・外への情報発信、（3）蒲原町と本学との文化・人材交流の促進、（4）本学教員の教育研究能力と参加学生の学習能力の向上といった諸点において、幾らかの貢献ができたものと考えている。

今後の課題としては、蒲原町での成果をどの様に蒲原町内外、大学内外で活かしていくことができるか検討する必要がある。とりわけ、長期間休みの夏休みを利用したサマースクールの様な短期集中的な教育プログラムの展開は、学生や教官にとって通常の授業では得られない貴重な機会であり、創造的に様々な事柄を試すことが出来る好機でもあると考える。

写真21．教官によるオリエンテーション風景

写真22．写真整理作業風景

写真23．屋外空間でのスライド上映

写真24．全体発表会での風景シミュレーション映像の一部

なお、本ワークショップは、「静岡文化芸術大学平成13年度・平成14年度学長特別研究費」の補助を受けて行われた。